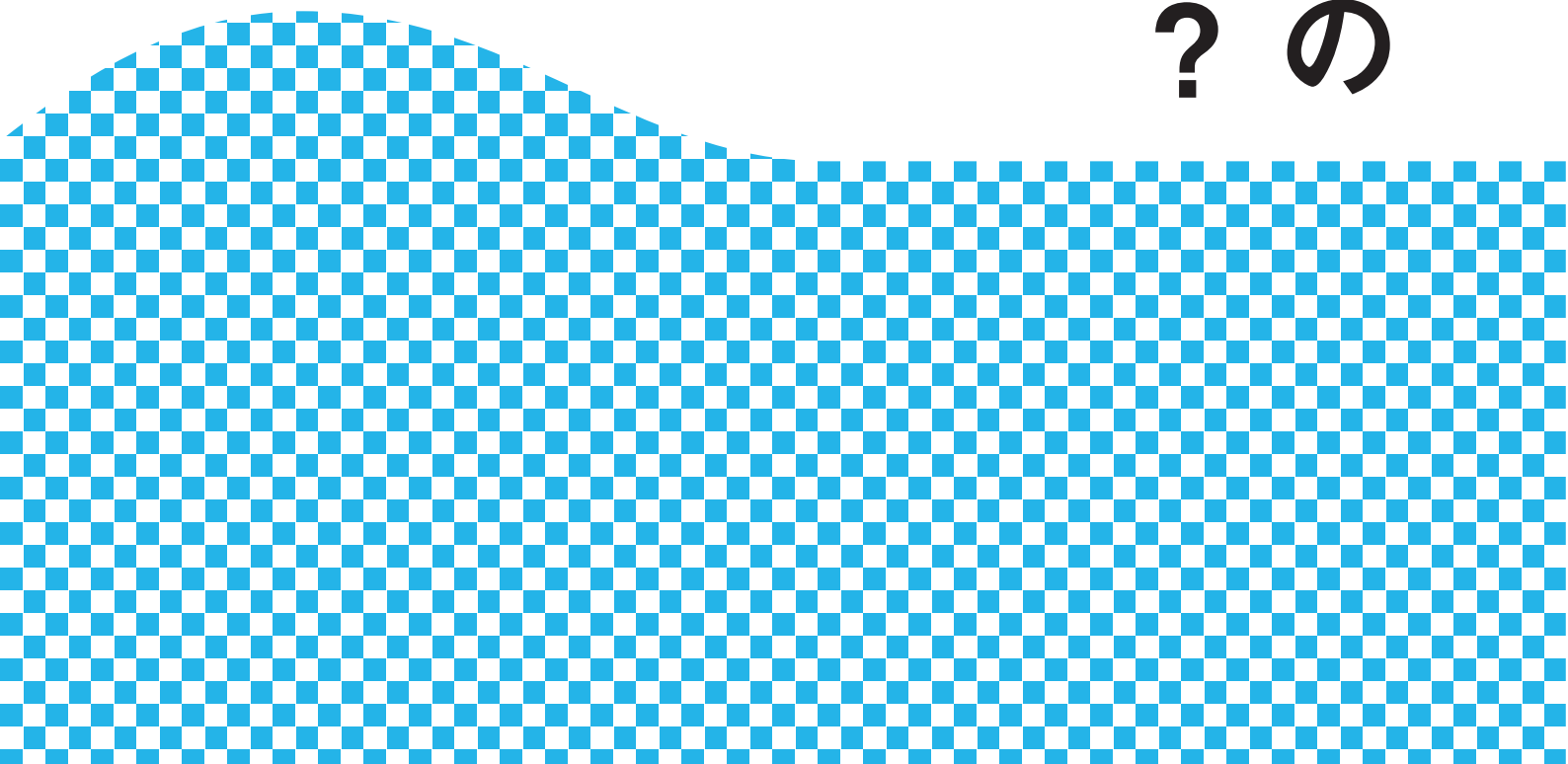


「大いなるメリツトのための
”小さな“犠牲問題」とは？
― 社会学的研究の一視点 ―

Watanabe Shinichi

渡邊 伸一

奈良教育大学社会科教育講座(社会学)



「大いなるメリットのための“小さな”犠牲問題」とは？ —社会学的研究の一視点—

奈良教育大学 社会科教育講座（社会学） 渡邊 伸一

1. 「大いなるメリットのための“小さな”犠牲問題」って何？

健康で安全に暮らしたい。そして豊かで快適な生活をおくりたい。これらは、多くの人の願いでしょう。政治家や行政（国や地方自治体）は、そのために様々な法律や制度を作り対策を立てていますし、企業もそうです。人々のそうした願いに応えられる商品やサービスを提供できないのなら最終的には市場から撤退するしかないからです。これら社会の営みに責任ある各主体の活動が、全ての人が幸せになることに貢献してくれているのなら、こんな良い社会はないでしょう。

しかし、現実には、そうした人々の願いに応えるべくなされたはずのもので、なるほど多くの人々が満足を得られている一方で、一部の人に犠牲が生じてしまう場合が存在します。これらは、金銭目的の強盗とか、やるべき点検を怠ったために発生した事故で犠牲者が出る、というタイプの犯罪や問題とは性格を異にしています。社会の多くの人々にもメリット（安全、健康、豊かさ等）をもたらそうと意図して作られたり、利用されたりしているものが、たとえ少数であれ犠牲（被害、デメリット、リスク等）を生み出してしまっているからです。

こうした性格特性をもつ問題を「大いなるメリットのための“小さな”犠牲問題」と呼ぶことにしましょう。この問題の多くには次のような特徴が見られます。

- ・メリットを受ける人の方が圧倒的に多いため、犠牲が存在することになかなか気づきにくい。
- ・たとえ犠牲者の存在がわかった場合でも、メリットの大きさに力点がおかれて、「少数の犠牲はしょうがない」とあまり問題視されないということが起こりがちである（ケースによっては、犠牲者の自己責任にされたりする）。

こうした問題をどう考え、どのように対処すべきなのか。私の社会学的研究における課題の一つはこの点にあります。以下では、まず、どういう問題がそういう性格を持っているのか、具体的な事例を見てみましょう。次には、私がこれまで研究してきたことを紹介してみたいと思います。私は、これまで公害・環境問題や環境保護を主に研究してきました。この分野には、この種の問題が多く見られるのです。

2. いろいろな事例

皆さんが高校生だとすると、通学にバス（自動車）や電車を使う人も多いでしょう。自動車は、非常に便利なものです。自動車なしには現代の私たちの生活は成り立たないと言ってよいでしょう。また自動車製造は日本の基幹産業ですから関連業界まで含めたら膨大な人々が職を得ています。しかし、自動車に交通事故はつきもので、年間約 3700 人の方が亡くなっています（2017 年）。その裾野には膨大な負傷者がおり、障害の残る人も多くいます。今日では、取り締まりの強化や安全対策が進み、死者数は減少傾向が続いています。また、自動運転などの先端技術にも期待が高まっています。しかし、1 日に 10 人もの尊い命が失われているという事態が急速に改善されることはないでしょう。このことをわかっていながら、自動車社会を止めないということは、年に 3 千人以上という死者が必ず生まれてしまうという前提の上に、便利で快適な自動車社会が成立していることとなります。

通学に電車を使う皆さんの最寄りの駅ホームには柵はあるでしょうか。電車も私たちの生活に不可欠なものです。しかし、転落事故が毎年のように発生しています。なぜホーム柵がない駅が多いのでしょうか。たしかに柵など転落防止のために様々な対策を取れば、そのコストのために定期券の値段（運賃）の上昇を招くでしょう。ホーム柵がないということは、多くの人がある分、低運賃で電車に乗ることができる一方で、少数とはいえ転落者を生み出している、といえます。

皆さんの中には、通学に病気予防のためにマスクをする、という人も少なくないのではないのでしょうか。特にインフルエンザは毎年流行します。病気予防には予防接種も有効です。多くの人を病気にせず救ってくれます。しかし、少数ですが必ず犠牲者が出ます。各種予防接種で



多くの人が病気にならずに済んでいる一方で、必ず副作用のために別の病気で苦しむ被害者を出す、という問題が存在しています。そもそもほとんどの薬が程度の差はあれ、そうした性質を持っているのです。

電車内では最近「不審な荷物を見つけたら教えて下さい」という放送をよく耳にするようになりました。単なる犯罪だけでなく、いわゆるテロにも警戒するためでしょう。これは大きくいえば、安全保障にかかわる問題です。日本には日米安全保障条約に基づき、米軍が駐留しています。その目的には日本を他国の侵略から守ることもあるとされていますが、その米軍基地は特に沖縄に多く存在しています。このため沖縄では米軍による様々な事件や事故が多発しているのはよく知っているでしょう。安全保障や防衛は全ての国民にかかわる問題であるのに、その矛盾や犠牲は日本の一部の地域に集中しているといえます。

電車は、言うまでもなく電気で動くものですが、電気も、家庭や学校そして生産現場において欠かせないものです。その電気を作る発電所の中で最もリスクの大きいものと言えば、原子力発電所でしょう。原発は、一度重大事故が起これば、取り返しの付かないほどに国土破壊的であることは、東日本大震災で私たちが経験している最中です。その原発は、各都道府県にまんべんなく設置されているのではなく、米軍施設と同様、特定地域に集中して建設されています。

今度は、視点を学校に移してみましよう。日本の学校行事には運動会があります。運動会の種目として、組み体操は花形として定着してきました。組み体操が盛んに行われるようになった理由には「団結力が身につく」「感動や達成感を味わわせたい」という教員側の思いがあるとされます。しかし、近年、組み体操が10段にも及ぶなど巨大化し、難度も高くなり、生徒が骨折するなどの事故が相次ぎ社会問題化しました。また、「ムカデ競争」もそうです。足をつないで集団で走るこの競争では、運動会やその練習中に2014年度で482人もの生徒が骨折しています（朝日新聞2015.10.15）。大



いなるメリット（「団結力」「感動」「達成感」）ための犠牲は学校現場でも発生しているのです。「団結力」「感動」等が大事なのはその通りだとして、骨折者まで出してやるのは間違っています。ですから、止めた学校もありますし、段数を減らすなど怪我をしない方法が検討されています。

このように現代社会においては、「大なるメリットの

ための“小さな”犠牲問題」に関わって、解決されるべき問題が各所に見られます。この問題で注目すべきは、メリットを享受する人とデメリットを被る人が別個の要因で発生しているのではなく、同じ要因（自動車社会、駅ホーム柵なし、予防接種、国防、発電、団結力の強化など）から生まれている点にあります。いわば犠牲者の存在を前提としてメリットが生み出されてしまっているのです。

基本的にそのようなしくみは改善されねばなりません。こうした問題の基本的な考え方は、犠牲者をゼロにすることです。直ぐにはできなくとも、将来的にはゼロにする対策をきちんと立てる。それを前提に、今でもできることは直ぐにやる。そして、その対策にかかわる負担や費用はメリットを享受している者が全員で担う、というのが原則でしょう。そして国や自治体はそういう制度を作る必要があります。

皆さんはどう思いますか。こうした原則は、きれい事に聞こえるでしょうか。たしかに言うは易く行うは難しです。実は、こうやって書いている私自身もそう思う場合がほとんどです。私が研究してきた公害・環境問題や環境保護の分野には、「大いなるメリットのための“小さな”犠牲」問題が多く見られ、解決されないケースも少なくないからです。以下では、これまで研究してきたことの一部を紹介してみたいと思います。

3. 水俣病とイタイイタイ病

食べ物の中で、お米（玄米及び精米）と魚介類（水産動物の総称。鯨などの哺乳類も含む）だけに、ある物質の安全基準値（一定以下しか含まれていてはいけない）が存在しているのですが、それらの物質とは何か知っていますか。米の場合はカドミウム、魚介類においてはメチル水銀という物質です。では、この基準値ができたきっかけを知っていますか。そうです、それぞれイタイイタイ病と水俣病です。前者は富山県神通川流域で、また後者は熊本県など不知火海一帯と新潟県阿賀野川流域で発生した公害病です。これらは四日市公害と合わせて四大公害病として教科書に載っていますから知っていますよね。

不知火海の水俣病についていうと、熊本大学医学部や厚生省（当時）が、病気の原因はチッソ水俣工場からの排水に含まれたメチル水銀だと 1959 年までには何度も指摘していました。しかし、時の政府は、それから 9 年もの間、排水規制をせず、これにより患者は不知火海沿岸部を中心にどんどん増えてしまいました。高度経済成長の

ためには、チッソの作る工業製品（化学肥料や塩化ビニール）は欠かせないという判断からです。水俣病は、まさに「大いなるメリットのための“小さな”犠牲問題」の典型例です。

これら公害事件がきっかけになり、メチル水銀など各種汚染物質の排出規制がなされたり、安全基準値が作られて、私たちの健康が守られています。私たちは、公害被害者の貴い健康や生命の犠牲の上に、安全な食べ物を食することができるということです。この意味で公害患者と私たちはつながっているのです。もちろんこれは公害に限りません。各種の事故や災害なども全部そうです。事故や災害が起こる度にその原因が調べられ社会がより安全になっていく。しかし、その裏には必ず多くの犠牲者が存在します。「犠牲者が私たちの命や健康を守ってくれている」と言ってもよいのです。

ところで、ここで、公害被害者に起こっている理不尽な話を指摘しなければなりません。水俣病、イタイイタイ病の両問題とも、全ての被害者が救済されているわけではないという点です。今度はイタイイタイ病を引き起こしたカドミウム問題を例にとって話しましょう。

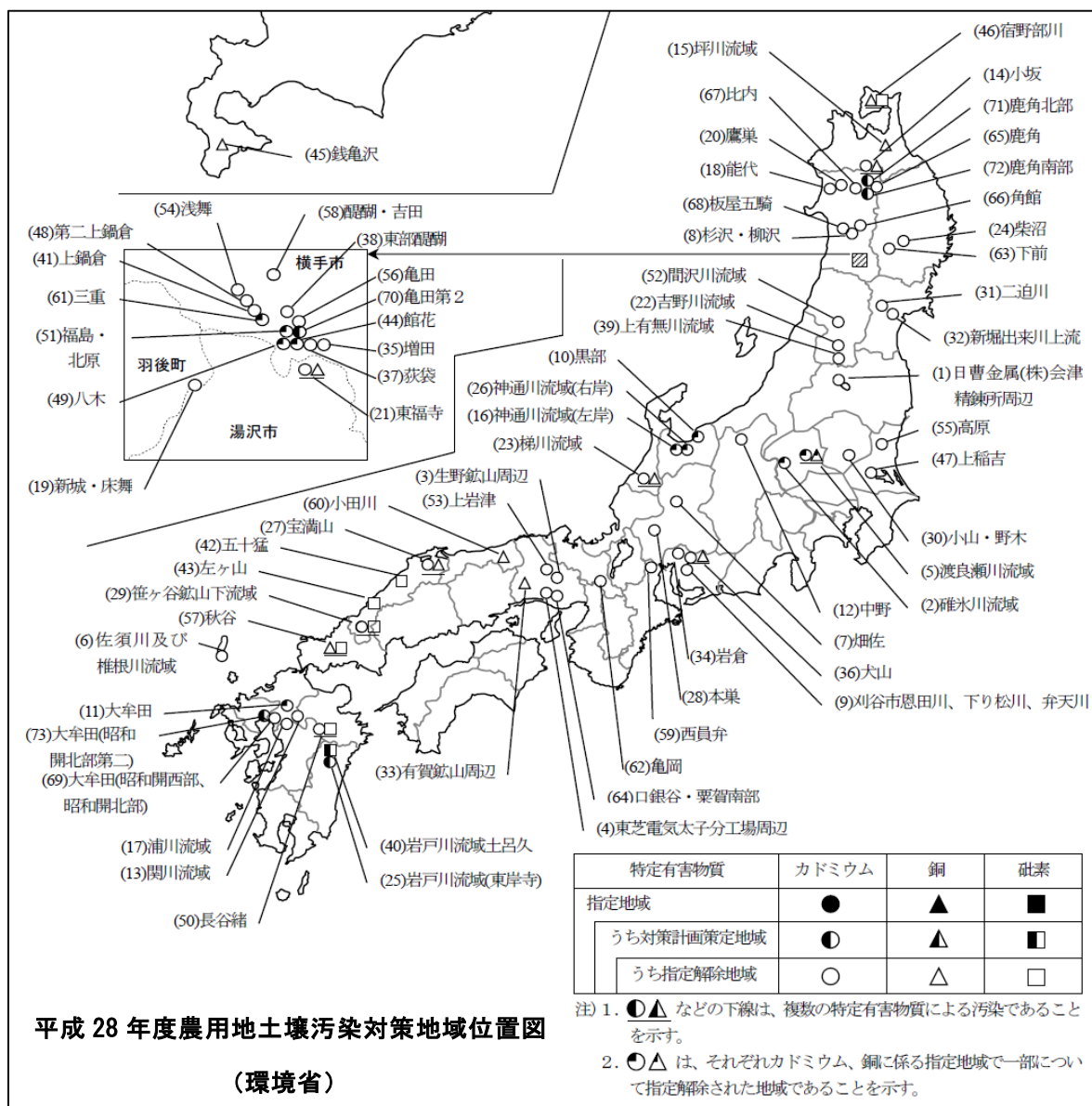
4. 放置されたカドミウム腎症

現在の米のカドミウム基準値は、0.4ppm 以下です。これは 2010 年に国が決めた数値です。それまでは、1ppm 以下でした。1ppm というのは、イタイイタイ病裁判中の 1970 年につくられた基準値ですから、40 年ぶりの改定でした。

カドミウムを摂取すると直ぐにイタイイタイ病になるわけではありません。その前に、腎臓が障害され（カドミウム腎症）、重篤になると骨が柔らかくなってしまい（骨軟化症）、骨折が多発しイタイイタイ病になるのです。0.4ppm 以下というのは腎障害にならないための基準値です。

カドミウムとは、亜鉛などの鉱石に含まれている金属ですが、日本には各地に亜鉛がとれる鉱山が存在してきましたから、カドミウム汚染地も多数存在します。そのため、農業被害だけでなく、汚染が深刻な地域には腎障害の被害者も少なからず存在しているのです。

ですが、日本政府は昔も今もこの腎障害を公害病に指定しようとせず、何もしていません。理由は、「病気ではない」「直ちに日常生活に支障はない」等というものです。



しかしですよ、「病気ではない」というなら、なぜ、腎障害にならないために米の安全基準値を改定したのでしょうか。しかも 40 年間も変えなかったのに。「病気ではない」というのなら、基準値など厳しくせずに、被害者と同様、放っておけばよいではないですか。

実は、基準値を 0.4ppm に改定したのは、世界基準値が 0.4ppm に決まったからなのです。カドミウムによる腎障害は日本だけでなく世界中で発生しており、その研究調査を受けて、食品の安全性と品質に関して基準を定める国際的機関（コーデックス委員会といいます）は、世界基準値 0.4ppm を作りました。それなのに、日本だけ 1ppm

のままというのは問題だ、ということになり、日本政府が急遽つくったのです。しかも、強調すべきなのは、この0.4ppmという世界基準値ができるにあたっては、日本の腎障害の被害者から得た日本人医学者による研究が生かされているという事実です。

貴重な健康を犠牲にして得られたデータが日本のみならず世界の人の健康のために役立てられている。つまり「大いなるメリット」を享受している。しかし、その被害者は、国によって公害病とは認められず放置されてきた。こんな理不尽なことはないでしょう。

富山の被害者団体は「腎障害の救済なくしてイタイイタイ病問題の救済なし」をスローガンに30年以上にわたり国（環境省）に、腎障害の公害病指定を求め続けてきました。しかし、国は、いっこうに認めようとしないので、2013年、被害者団体は、加害企業（三井金属鉱業・神岡鉱業）と直接交渉することにより、腎障害者一人あたり一時金60万円を獲得しました（対象者は600～1千人程度）。国が病気だと認めない

「健康被害」を「補償」させるのですから、それは大変でした。この金額の値がそれを物語っています。

もっとも、これは富山だけの話です。富山を除く全国のカドミウム汚染地に住むカドミウム腎症の被害者は捨て置かれたままなのです。

イタイイタイ病 決着へ

朝日新聞 2013. 12. 14

5. 「奈良のシカ」による^{るくが}鹿害問題

次に、「奈良のシカ」をめぐる問題についてお話ししましょう。私が奈良教育大学に勤務したのは1996年からですが、その時、初めて奈良公園で「奈良のシカ」（国の天然記念物）を見ました。驚きでした。動物園のように柵で囲っておらず問題が生じないのかと。調べてみたら問題が多いことがわかりました。まず、農業被害です。奈良公園だけにいてくれと望んでも、周囲に柵がないのですから無理です。その上、保護すれば増えます。増えれば外へも出て行き、農業被害など各種の被害（鹿害）を引き起こします。「奈良のシカ」は春日大社の社伝によれば鹿島神宮（茨城県）から来たと言われており、そこには現在もシカはいます。ただし境内に設けられた柵（檻）の中で



手前から、奈良公園（飛火野）のシカ、御蓋山^{みかさやま}、春日山原始林

飼われています。

一方、柵で囲われていない「奈良のシカ」は、実に多くの人にメリットをもたらします。奈良公園を訪れる人にとっては、シカせんべいの給餌などを通じてシカとふれあうことができますし、「シカのいる景観」も享受できます。また、観光都市・奈良にとっては貴重な観光資源です。因みに、奈良教育大学のイメージキャラクターである“なっきょん”も、「奈良のシカ」がモチーフです。

他にも春日大社の神鹿としての宗教的価値や、天然記念物としての学術的（自然的価値・歴史的・文化的）価値がありますし、そもそも「奈良といえばシカ」というくらい、奈良を代表するシンボルにもなっています。柵の中で飼えば、これらの価値やメリットは無くなるか半減してしまうでしょう。だから柵で囲わない



のですが、だとしたら農業被害を出さないための工夫を受益者たちは責任をもってすべきでしょう。農業被害の賠償のために、農家は裁判まで起こしました（1980年前後）。しかし、抜本的な対策はとられませんでした。奈良公園周辺農家は、長年にわたって「大いなるメリットのための犠牲」を被ってきたのです。

「奈良のシカ」のもたらす問題には、他にシカによる人身事故や春日山原始林の食害問題などもあります。春日山原始林とは、「奈良のシカ」よりも格上の特別天然記念物で、かつ世界遺産でもあります。「天然記念物（シカ）が世界遺産（原始林）を破壊

している」とは、実に“奈良らしい”環境問題といえましょう。

これら各種の鹿害問題については、長年にわたって適切な対策がとられなかったのですが、近年、ようやく奈良県がリーダーシップをとり、対策を進めてきています。私も県の対策委員会の末席に名を連ね、今まで研究してきたことを少しでも役立てるべく努力しているところです。

6. おわりに ー社会学の存在意義

冒頭で挙げた「自動車事故」や「組み体操事故」などの問題は、ほとんどの人が知っている問題でしょう。しかし、「カドミウム腎症」や「奈良のシカ」による問題は、今回初めて知ったという人も多いのではないのでしょうか。社会学者は、一部の人には実に深刻な事態なのに、多くの人には未だ明確に認知されていない問題を研究し、情報発信することを重要な仕事と考えています。

関連して、社会学は一般常識を疑ってかかることを重んじ、それをレゾンデートル（存在証明）の一つにしています。多くの人が常識だと思っているからといって、それが常に「正しい」とは限りません。『倫理』の教科書でもお馴染みのカール・マルクスは「いつの時代でも支配的な思想は支配階級の思想だ」と言いました。一般常識や“当たり前”なこととは、政治的・経済的に力のある者が意図的につくり出した考えかみもしれず、そのことに自覚的であれ、という意味です。「原発の安全神話」など、まさにその端的な例でしょう。

授業などで「常識を疑え」と言うと、「そんなことばかりしていたら、反論ばかりするひねくれた人間になるから嫌だ」という学生さんがたまにいます。しかし、常識を疑うためには、その常識をよく知っていなければなりません。それはなぜ常識なのか、いつから常識なのか、その根拠は何か、などをです。常識を詳細に知らずして、説得力のある常識批判などできはしないのです。結果として、ひねくれ者どころか、世間の事情に詳しい人になり、社会に出ても重宝されますよ。

でも常識を疑う姿勢は、多数派が大いなるメリットを享受して「これでいいのだ」と納得している中に分け入って、「それって少し違うんじゃない、こんな問題もあるよ」と水を差すことにもなるわけで、人を不快な気持ちにさせたり、^{ひんしゅく}輿^い論^{ろん}を^を買^かう^ことも^もな^ない^いわけ^けでは^はあ^あり^りま^ませ^せん。

しかし、そういう視点も大事なのです。大いなるメリットだけに目を奪われていて

は、存在するかもしれないデメリット（犠牲）に目が向かない。それでは、社会の現実を知ったことにならないでしょう。またそうした社会の仕組みや、つながりを改善しようという気持ちにもならないでしょう。こういうことを学ばずして学校の先生になってもらっては困るのです。その意味でも、社会学者は、教育学部に不可欠な存在だと私は思っています。

<さらに詳しく学びたい人のために>

・船橋晴俊・古川彰編著（1999）

『環境社会学入門』文化書房博文社

・鳥越皓之・帯谷博明編著（2009）

『よくわかる環境社会学』ミネルヴァ書房

・奈良の鹿愛護会監修（2010）

『奈良の鹿 －「鹿の国」の初めての本』京阪奈教育情報出版

・藤川賢・渡辺伸一・堀畑まなみ著（2017）

『公害・環境問題の放置構造と解決過程』東信堂

渡邊 伸一 (Watanabe Shinichi)

新潟県新井市（現妙高市）出身

1994年 東京都立大学大学院社会科学部社会科学専攻

博士課程満期退学（社会学修士）

同年、大分県立芸術文化短期大学講師を経て、

1996年奈良教育大学准教授。2013年同教授。



【研究テーマ】 公害・環境問題や環境保護の問題を中心に調査・研究してきましたが、新しいテーマでも研究を進めようとしています。奈良はまさに“まほろば”。最近、ますます奈良が好きになってきました。「奈良のシカ」だけでなく、奈良に住んでいるからこそできる研究をもっとやりたいと思っています。

【趣味】 奈良公園を歩くこと。奈良公園を歩き始めて20年以上になりますが、歩く度に新しい発見があります。まさに歴史・文化・自然のワンダーランド。健康にも良いし、研究意欲も刺激されます。しかし、春は困りものです。「奈良の八重桜」「奈良の九重桜」などがこの上なく美しいので、「世の中に 絶えて桜のなかりせば 春の心は のどけからまし」（在原業平）という状態となり、研究が捗らなくなるからです。

【座右の銘】 Ask, and it will be given to you; seek, and you will find; knock, and it will be opened to you. （新約聖書、マタイ伝） 若いときの座右の銘で、生きる上で悩んだり迷ったりしたときは、この言葉をリフレインし、自分を鼓舞していました。

「大いなるメリットのための“小さな”犠牲問題」とは？

— 社会学的研究の一視点 —

著者 わたなべ しんいち
渡邊 伸一

2018年3月31日 第1版

奈良教育大学出版会

〒630-8528

奈良市高畑町

TEL: 0742 (27) 9135 FAX: 0742 (27) 9147

E-mail: g-kenkyu@nara-edu.ac.jp

URL: <http://www.nara-edu.ac.jp/PRESS/>